多摩川の名脇役

300年の歴史を持つ稲城市の文化遺産

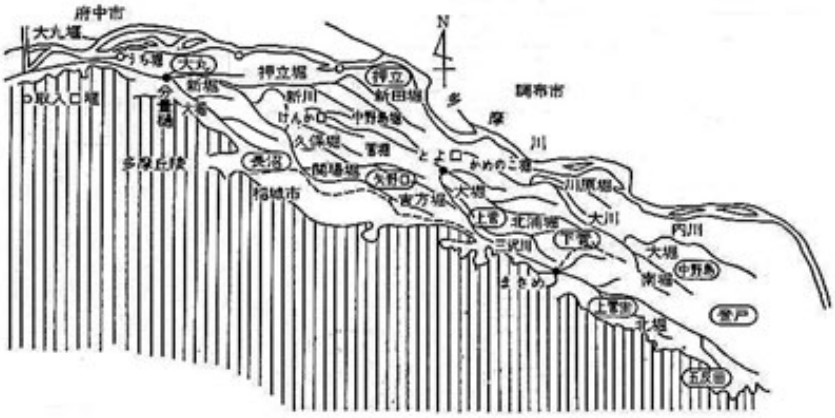
15. 大丸用水（おおまるようすい）（東京都稲城市大丸～神奈川県川崎市登戸）

大丸用水は、稲城市大丸の取水口から多摩川の水を取り入れて、川崎市登戸まで流れる多摩川右岸側に位置する用水で、9本の本流と約200本の支流を合わせた総延長は70kmに及びます。 その歴史は古く多摩川沿いの他の用水路と共に、江戸時代初期に農業用水として開削されたと考えられます。現在では稲城市から川崎市多摩区生田までの梨園や水田等に水を供給しています。民家や水田・畑が用水路の脇に隣接している箇所も多く、用水路沿いの小道は散策路として整備されています。

（左から時計回りに）
遊歩道脇の用水路／分水路で憩うカルガモ／菅堀（左側）と押立堀の分岐路／水田脇の用水路／親水公園入口（写真-H20.8撮影）

江戸時代に開削された大丸用水－・－・－・－・－・－

「大丸用水」の開削工事は、年貢の増収をねらって江戸幕府が行った大規模な治水政策の一環として、二ヶ領用水や府中用水の開削工事が行われた１７世紀頃（江戸時代初期）にほぼ同時に始まったとされていますが、詳細な史料が残っていないため、正確な開削時期は分かっていません。　用水は細かく分岐され立体交差されている箇所もあるなど、すべての農地に水を引くための工夫がされていました。



【出典：3.4.2　江戸時代の大丸用水の組織と運営，国土交通省関東地方整備局京浜工事事務所・ 財団法人河川環境管理財団編集，新多摩川誌，「図4.1.9　大丸用水水系図」】

用水整備後は流域の大丸村・長沼村・押立村・矢野口村・中野島村（武蔵国多摩郡：現在の東京都稲城市）、菅村・上菅生村・五反田村・登戸村（武蔵国橘 樹郡：現在の神奈川県川崎市多摩区）の計九村の農家で「大丸用水九ヶ村組合」を結成し、用水を利用していましたが、日照りや渇水時には、少ない水をどう配分するかをめぐって組合内での水争いが絶えませんでした。しかし、用水の維持・管理には組合内で労働力と資材を負担して、用水路・用水堰・取水口・入水口の修繕を行っていました。

1727年（享保12）には、農政家の田中丘隅[*1]によって用水の全面改修が行われています。また用水の普及に伴い新田開発が進み、徳川第八代将軍吉宗の時代には、幕府の財政問題の本格的な取り組みとして、年貢増収を目的とした新田検地[*2]が行われるようになりました。

用水の維持・管理に尽力した九ヶ村組合－・－・－・－・－・－

多摩川は荒れ川で洪水による水害が生じる度に、取水堰が破壊されました。復旧工事は、幕府の御普請[*3]場と大丸用水九ヶ村組合の自普請[*3]場が定められていましたが、この復旧工事費用は莫大で組合にとっては大きな負担でした。そのため組合は、代官所や私領の役人に公費による復旧工事をしてもらえるように願い出ていました。1793年（寛政5）頃に登戸村が組合から脱退して八ヶ村組合となり、1931年（昭和6）に中野島村が脱退して七ヶ村組合になった後も、この陳情は続けられました。

戦後は1949年（昭和24）の土地改良法に基づいて、1952年（昭和27）に「大丸用水土地改良区」が管理をするようになりました。

大丸用水の流路ー・ー・ー・ー・ー・ー

分量樋で分けられた用水路（菅堀・大堀・押立堀・新堀）

多摩川から取水された「大丸用水」は南多摩駅付近の分量樋[*4]を境に大きく3つに分けられます。　分量樋で分けられた南側の流れは「大堀（清水川）」と呼ばれ、長沼、矢野口を流れて三沢川に合流しています。かなりの部分が暗渠[*5]化されてしまったため、今日では水の流れを辿るのが難しくなっています。　一方、分量樋で分けられた北側の流れは、イチョウ並木通りと川崎街道の間を川崎方面に数百メートル流れた後、「菅堀」と「新堀」の2つに分けられます。北側の菅堀の一部は矢野口（多摩川原橋の少し下流）で多摩川に戻ります。　南側の新堀も、川崎市多摩区菅で二ヶ領用水と交差し、三沢川と二ヶ領用水に合流して多摩川に戻ります。

用水路脇の休憩所

江戸時代から農業用水として利用されてきた大丸用水は現在でも梨園や水田に水を供給しています。　昭和30年代後半からの急激な宅地化（多摩ニュータウン計画、等）や戦後にできた米軍立川基地の廃油の放流などにより、多摩川と用水の水質は著しく低下しましたが、下水道の普及により美しい用水を取り戻し、一時は減ってしまった小魚や藻も戻ってきました。

また大丸用水の幹線である菅堀の水を取り込んだ大丸親水公園は、その名の通り親水公園[*6]として整備され、市民の憩いの場となっています。

「大丸用水を取り巻く流域の歴史」	
1603年 (慶長8) ・・・	・徳川家康が江戸幕府を開く
1624年 (寛永元) ・・・	・大丸村・長沼村が旗本朝倉豊明の領地となる
1650年 (慶安3) ・・・	・大洪水により多摩川の川筋がかわる
1699年 (元禄12) ・・・	・大丸用水九ケ村組合により修繕資材の負担が行なわれる
1727年 (享保12) ・・・	・田中丘隅によって大丸用水の全面改修が行われる
1753年 (宝暦3) ・・・	・長沼村と菅村との間で大丸用水の分水量をめぐり争論がおこる
1811年 (文化8) ・・・	・矢野口・大丸・長沼・百村が「お鷹場四カ村組合」として『田畑名寄帳』に記載される
1952年 (昭和27) ・・・	・大丸用水土地改良区が設立される
1959年 (昭和34) ・・・	・大丸用水取水設備が完成する

*1 たなかきゅうぐ
田中丘隅

・・・ 武蔵国多摩郡平沢村（現在の東京都あきる野市平沢）出身の江戸時代中期の農政家。徳川第八代将軍吉宗に登用され、荒川・多摩川の治水、二ヶ領用水・大丸用水・六郷用水の改修工事、酒匂川の補修などを行いその功績が認められて1729年（享保14）に代官となった。

*2 しんでんけんち
新田検地

・・・ 新しい田畑に対し面積と収穫量を調査すること。江戸時代には農業技術の進歩に伴い新田開発も進んだが、幕府や藩の財政が悪化すると度々検地を行い、農民に対して年貢の取り立てを重くした。現代の課税台帳（固定資産の状況および固定資産税の課税標準である固定資産の価格を明らかにするために市町村等に備えられた台帳）整備に相当する。

*3 御普請・自普請

・・・ 御普請とは幕府が行う公共事業であり、自普請とは地域住民が自主的に行う公共事業のこと。江戸時代は大半が「自普請」であり、農村社会では水利の確保・水害対策などがそれに当たった。地域住民で協力し合って資金や労働力を出し合っていたと言われている。

*4 ぶんりょうひ
分量樋

・・・ 木製の樋（とい）によって各用水路に水を分配する施設のことで用水路開削時に作られた。現代の「分水工」に相当する。灌漑面積によって水路の入口の幅が決められているが、日照り等の水位の変化によって分水比率が変わる等、常に正確な分水をすることが難しかったため、組合間での水争いもよく起こり、分水路付近は喧嘩口と呼ばれる場所もあった。

*5 あんきょ
暗渠

・・・ 覆いをしたり地下に設けたりして外から見えないようになっている水路のこと。

*6 しんすいこうえん
親水公園

・・・ 下水道の整備等で不用になった河川・海・池・湖沼などの水を意図的に取り入れ、水と親しめる公園に蘇らせた施設の総称。